父	富雄	明治四十四年六月一日
母	ツタエ	大正七年九月六日
長男	博司	昭和十五年七月四日
次男	晃	（本人）
三男	武司	（中国より引揚途中病死）
四男	栄三	昭和二十二年七月十六日（後に改名　浩章）
五男	敏	昭和二十五年五月三十日

父親と中国出生地にて
山西省太原市上肖墻街59号

一歳の頃かな

昭和拾八年五月拾五日中華民国山西省太原市上肖墻街五十九号ニテ亡父河野富雄届出同月拾九日同国駐在太原総領事受附同年七月弐拾七日送付入籍（豊田）

昭和弐拾弐年七月拾七日徳島市北島田町二丁目三十七番地ニテ亡父河野富雄届出同月弐拾八日受附入籍（豊田）

父	河野富雄	二
母	ツタヱ	男

出生	昭和拾八年五月拾五日	四
父	河野富雄	
母	ツタヱ	分

出生	昭和弐拾弐年七月拾七	三

河野晃の世界

一九四二～二〇二二年（執筆時）

一、中国時代（幼少期）
二、小学校時代
三、中学校時代
四、高等学校時代
五、社会人時代
六、大学時代
七、社会人時代
八、経営時代
九、テナント時代
十、終活時代

一、中国時代（幼少期）

一九四二年五月十五日、中国山西省太原にて産まれる。一九四五年八月終戦になり、その年の暮れか翌年日本に引きあげる。山西省の冬は寒い。終戦となり日本に帰る事になるが、この山西省太原の記憶は、冬の寒いこと。カマドのヘリでジャガイモを焼いている。満鉄の舎宅の外で眺めているとラクダが四、五頭位荷物を運ぶ光景が脳裏にあった。中国にラクダがいること、それがわかったのは、自分が六十歳をすぎて中国工場で製造を始めて、現地社長周さんに確かめると、シルクロードのラクダで荷物を運んでいたとの事で記憶は間違ってなかった。

父親は満州鉄道の機関士の為、終戦になった時は遠くに居たので舎宅に帰るのが遅れる事になり、家族は父親の帰るのを待っていよいよ日本に帰る事になると、近所の中国の人達が日頃の付き合いがあったのだろう、これから遠い日本に帰るので食糧を我が家族に持たせてくれたと、母親がよく話してくれていた。餃子やマンジュウを作るのが上手なのは中国の人に教わっていたかも。集団で天津まで歩くが、きれいな水もなく食糧も充分でなく、料理も出来ない中、体力ない子供達はおおかた病気になる。赤痢や疫痢で亡くなることも。実際自分と兄も疫痢で弟は天津に着く前に亡くなる。天津に土葬したとの事。自分と兄は体力があったのか死ぬ事なく日本に帰れた。途中覚えていることは、歩いて天津までの夜、笛を吹いて叱られた事や天津から引き揚げ船の中で寒くてよく揺れた事など、それ以外はほとんど記憶なし。そして徳島へ。徳島は父親の故郷の為で、母親の実家は佐賀県東唐津の漁師の娘で海の砂浜に家があった。徳島の駅に着いて駅前広場は地面に石炭のガラが敷きつめられ地面が黒く駅前広場になっていて人力車が何台も並んで客を待っている。車の社会でなくまだ人力車や馬車の時代だ。タクシーはまだ無い。人力車でどこまでも、馬車は主に砂、ジャリなど貨物トラックの代わり。この町に自家用車はなく、バスは木炭車だ。我々の家族でも自転車も持てない時代だ。ラジオもない電燈もない、ランプだった。朝ランプのすすを磨くのは自分の役目だった。家は借家住まいだ。借家平屋に二家族が住んでいる状態だった。父は満州鉄道からの帰りが遅い為、日本の国鉄の入社場所がなく、空きが出来るまで、毎日足にゲートルを巻

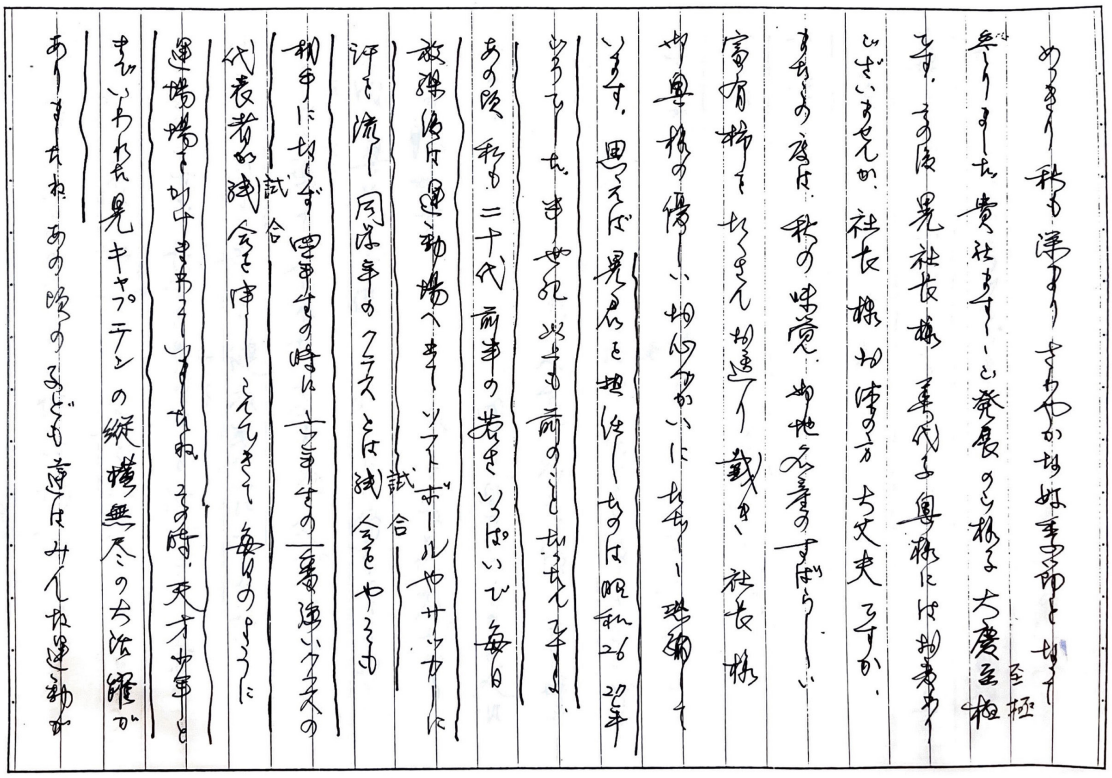
いて地下タビで出掛けていた。その内地方の駅鴨島駅の踏切番の仕事につく。給料も安そうなので自分達の小遣いはめったにもらえない。引きあげて最初の住所は徳島市北島田町一丁目だった。神社の横で道路に面してた長屋の狭い借家であった。ここで弟達二人が産まれる。この時代大きな地震が発生する。父親が自分達をかかえて前の神社に避難する。この狭い借家に二家族で住んでいたので余りに狭いので、北島田三丁目の二階建ての三軒長屋に移る。二階はおばあさん、名前が河野イワと言う。いとこの母親と息子名前が坂本という。下に自分等子供四人と父母だった。この頃電燈が来るがその後父親がラジオの五段スーパーを買って来た。家族全員でラジオの前に並んでいよいよ父親がスイッチを入れる。初めて我家にラジオ放送を聞く。それまでは近所の家庭でラジオを聞いてた。人気番組のエンタツ、アチャコのお父さんはお人好しというのが放送されていた。貧しくとも楽しかった。電気が一般家庭にも設備されたのでラジオや電球がつくようになる。但しハダカ電球だった。ランプのすすみがきの役目も終わる。その後自転車も中古品だが一台買った。バスはまだ木炭車が家の前を走っている。家の近くに久保津神社が在る。我々子供達の遊び場だ。野球をよくやった。そのボールで友達の家のガラスを割ったりしたものだ。神社のまわりに大工の田中さん、林の自転車屋さん、床屋の枇杷谷の初ちゃん、他にもよんきんの家も、仲間の家が多く在った。二〇二三年（令和五年）は友達皆んなどこでどうしているか床屋の枇杷谷の初ちゃんだけ松山道後に住んでいる。北島田三丁目の自宅も娘さんが住んでいるとの事。

加茂名小学校三年三組担任森岡進先生からの

河野晃の当時の思い出の手紙

先生七十九歳の時、晃六十三歳の時

五十三年位前の記憶



2

大きくなるまで、よく頑張ってくれたね。あの時のちいさかった男の子が浮かびあがってきます。男君は運動神経抜群でスポーツ万能、ケンカも一番強く（ひとケンカしたとき、相手方の友人を掌握する力がすぐれていてクラスのみんなから信頼されていたので、チームのみんなが一丸となって一生懸命にやっていたね。ちょっと誠会をする強かったこともあったね。）三つ子の魂百まで"と"完璧主義"がありますが男君はその時から強さと優しさを持ち合わせていたね。人生で強さと優しさを持ち合わせて人から信頼され明るく楽しく生きる人は人生の勝利者になりますね。これは男君だけでなく男性とも優しく愛情あふれる家庭を築くことができるでしょう。スポーツを楽しく明るく楽しく健康第一にして長生きしてください。長生きすることは河野君に笑われるかもしれませんが私たちの手にかかると（健康が宝の寿命にあり）今年の五月に男性の平均寿命である79才を

3

通過し今79才半です。もう八十才に手の届く時代になりました。同級生の多数が亡くなっていくのを見ていると ほんとうに長生きしなければと思っています。家内の母君のように長生きしわかる範囲で同級生のお墓めぐりをしていたこと、そして元気で生きられていることに感謝しています。お礼状を と思ってペンを執ったのに河野君はほんとうに えらいやつだ。優しい男だと思う。暫く君を一緒にスポーツに励んだ若き日の若々しい姿に戻って河野君と仲よく過ごしたいね。長く長く連絡しなくても良いね。男君と多代さんの愛情いっぱいのお心にたびたび感謝の念で一杯です。ほんとうに有難うございました。十分にお礼をさせて頂きたいと思っています。

平成二十年十月吉日　義岡

河野　男様

義岡　様

小学３年３組の森岡進先生と同級生の一部
森岡先生 令和３年(2021)２月６日96歳永眠

先生の左隣が自分

家族徳島市北島田町３丁目の借家の横にて
後ろは鶏小屋
前列　左弟栄三、右敏　後列左父、右母

第一章　沿革

一　沿革概要

わが加茂名小学校が明治六年三月六日、島田村河野道次郎方において「時中学校」の名をもって、創立されて以来、ことしで開校満百年を迎えることとなった。創立以来、時代の進展に伴い、学校名・校地・校舎・校区等に幾多の変遷はあったが、いずれの時代においても、本校区児童の教育の殿堂であり、幾多の人材を育成し、徳島市の発展はいうまでもなく、黎明の日本の前進と日本民族の幸福増進のため、多大の貢献を続け現在に至っている。これは、校区が県郡の中心部に位置し、文化水準が高く、教育の進展に伴う施設が他地区に先行して実施される長所をもつとともに、これにふさわしい学校長・教職員を得たからであろう。卒業生はすでに一万五千人に垂々としているが、いずれも時代の要請する人材として活躍を続け、全国的に著名の士も決して少なしとしない。

次に本校百年の歩みを、明治・大正・昭和前期・昭和後期に大別して、その概要を述べることとする。

沿革

㈠　明治時代

明治時代は、日本の寺小屋、私塾等の庶民教育を基盤にした初等教育が次第に制度として確立し、六か年の義務教育が普及し完成した時代といえる。わが国の小学校の多くは、明治五年八月に頒布された学制に基づき、明治六年以後に設立されたのであるが本校も、明治六年三月六日、島田村に創立されたのである。職員は河野道次郎・東条礼三の両氏である。学制にそえて公示された「被仰出書」の「自今以後一般人民必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめんことを期す」との趣旨に基づき発足したのである。

この頃は、上下二等の小学（下等小学は六才～九才、上等小学は十才～十三才各四か年間就学）に分かれ、男女ともなるべくこれを卒業させるよう督学したけれども、未だ確然とした義務教育の制をとるに至らなかった。

明治十八年十二月、内閣制度が創設せられ、森有礼が文部大臣に任ぜられると、国家主義の立場から教育制度の大刷新を断行し、明治十九年にいわゆる「学校令」が発布せられた。初等教育に関しては、十九年四月に小学校令が定められ、これにより名東小学校一校にて教育を行なっていたのが、同九月五日、名東・島田・蔵本・庄の四校を復興させ、教育を実施することとした。

明治二十三年十月、教育に関する勅語が渙発せられ、わが国教学の基本が確立せられた。同月発せられた改正小学校令第一条には、「小学校は児童身体の発達に留意して道徳教育及国民教育の

二沿革史

和暦	世界の動き	日本の動き	本校発展の歴史
明6	独・ロ・オ三帝同盟締結	地租改正行なう・徴兵令布告・仇討禁止令	明治六年三月六日、島田村の河野道次郎方に時中学校が創立された。
明7	仏軍安南攻げき 安南フランスの保護領となる スタンレーアフリカ横断	板垣・副島ら民選議院設立建白書提出・佐賀の乱 北海道屯田兵制度設立 大阪神戸間鉄道開通	明治七年四月一日、時中校を島田村本願寺に移転した。 この本願寺の鐘が河野の名のある現在も在る。
明8	仏国共和国憲法成立 独国社会主義労働党結成	ロ国と千島・樺太交換 東京・青森間・津軽海峡 北海道の電信線なる	明治八年十一月十日、学制改革により左の学校を設立した。 明治学校　庄村　正善寺（通学区域）　庄・島田両村 蔵本学校　蔵本村　地福寺　蔵本村 観愛学校　東名東村　佐藤秀　東名東村 日進学校　西名東村　大原瑠瑞　西名東村
明15	独・オ・伊三国同盟 スタンダード石油トラスト成立	軍人勅諭発布・伊藤博文憲法調査のため欧州出発 日本銀行開業	明治十五年四月十七日、島田小学校を新築した。 明治十五年七月三日、庄村小学校を新築した。 明治十五年八月十五日、蔵本小学校を新築した。
明16	英エジプト属領化 仏国象牙海岸・ソマリランド取得	教科書認定制度実施 伊藤博文帰国 鹿鳴館開館	明治十六年四月七日、名東小学校を新築した。 明治十六年、右四校が分立していたが一時蔵本村は佐古町へ合併し通学することになったので、庄・島田・東西名東を合わせて一校とし、名東小学校において教育を行なった。
明19	独ソロモン群島領有	天気予報開始 小中学校令公布	明治十九年九月五日、教育令の改正によって名東・島田・蔵本庄の各小学校を復興させた。

第二章　校地・校舎

学校名	設置年代	校地・校舎
時中小学校	明治六、三、六	河野道次郎宅に設置
〃	〃 七、四、一	島田村本願寺に移転
明治学校	〃 八、一一、一〇	庄村正善寺につくる
蔵本小学校	〃 〃	蔵本村地福寺に設置
日進小学校	〃 〃	西名東村大原瑠璃宅に設置
観愛小学校	〃 〃	東名東村佐藤秀宅に設置
島田小学校	〃 一五、四、一七	山本久平宅に設置
庄村小学校	〃 〃 七、三	若宮神社跡につくる
蔵本小学校	〃 〃 八、一五	現在の蔵本町松家氏宅に設置
名東小学校	〃 一六、四、七	袋井用水西南付近に設置
	〃 一九、九、五	庄・島田・東西名東を合併もとの位置に復校する
庄小学校	〃 二一、九、一	庄・蔵本・島田・東西の名東を一括し、加茂名と称した
庄尋常高等小学校	〃 二四、四、一	島田・名東・蔵本の分教場の合併
加茂名尋常高等小学校	〃 三〇、四、一二	庄・蔵本・島田・東西の名東の全五か村を合併する
	〃 三〇、五、二五	開校式挙行、以後、この校名がつづく

加茂名尋常高等小学校時代の校地・校舎の拡充

設置年代	校地・校舎
明治三三・七・五	校舎を増築上棟式を挙行する
〃 三六、九、一八	校地拡張（一反四畝二二歩）
〃 四〇、六、一九	増築校舎落成式
〃 四三、九	補習教室を新築
〃 四四、九、一	校地拡張（一反二二歩）
大正　四、二、二八	校地拡張（四畝二六歩）
〃 一一、一、二二	校舎一六〇坪増築
〃 一一、一二、四	校地拡張（一反五歩）
〃 一三、四、三〇	校舎一二〇坪増築落成
〃 一四、四、一六	校舎一一九坪増築落成
昭和　三、一、二三	校舎一二一坪六教室を増築し新校舎（十教室）一棟落成
〃 三、五、二六	旧運動場に隣接し一町歩（南側二段歩水田を残し）の運動場を拡張し、トラック、フィルドを設置する
〃 五、九、一四	運動場全部の地上げ盛土をし、体操競技用具を新設する
〃 七、八、一	徳島県名東郡加茂名尋常高等小学校と改称
〃 一〇、五、二九	校舎改築竣工（昭和九年八月二日起工）

晃小学校一年の時桑原忠治校長正月の全校訓示にて加茂名小学校の沿革を話す

第五章　教職員

一　歴代校長

妹尾　芳蔵	日野　善七	山中武次郎	
稲塚　逸次	斉藤　忠太	南　正実	
井村　清	尾崎　弘	堀　賢雄	
桑原　忠治	鎌田　謙一	小林市太郎	
桑田　輝男	岩野　定雄	重松　勝巳	
岡田　嘉行			

二　教職員　◎印は校長を含む

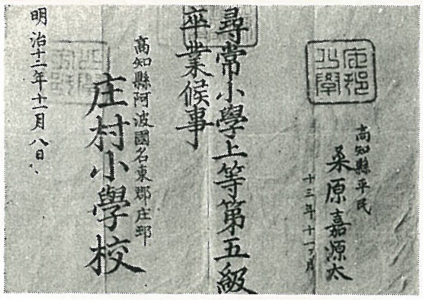
■明治

氏名	在職年数	氏名	在職年数	氏名	在職年数	氏名	在職年数
河野道次郎	三	大原　瑠璃	一〇	林　源一	六	本田　春吉	六
佐藤　秀	不詳	桑原多喜治	不詳	西岡常太郎	二	小林　文平	一九
河村左源太	二三	大曽根チエ	五	紀伊　タカ	三	東条　礼三	三
西　政太郎	七	高田牛太郎	三二	宇野　兵吉	二	藤井楠太郎	一一
岩村　定衛	五	川人　ナミ	六	広島秀太郎	一	吉田駒三郎	二一
岡　照吉	一	宮本弁次郎	六	高野小源太	七	梯　小一郎	一
鎌田　フジ	三	三好　熊吉	一	笠置　喜市	七	井上　誠一	七
枝川　静馬	一	佐藤　隆吉	一	山口貞太郎	三	鈴江　勢峰	三
杉原富太郎	二	高田　覚	二	五宝翁太郎	二	柴田董次郎	一
成田喜五郎	一	大曽根ムメ	三	坪内　武弥	一二	佐藤　松垂	六
				高橋儀三郎	二	河野　広吉	一
				淡島賢太郎	一四	大石　親良	不詳
				榎本　禎吉	七	岸阿弥太郎	不詳
				吉成永次郎	一	三木　官平	二
				槙野　万吉	二	岸　礼全	一
				橋口　岩吉	一	小坂伊三郎	六
				岸　清五郎	一	大石猪四松	不詳
				河端益太郎	不詳	板東伊佐雄	三
				山中　栄	一	滝津　剛一	不詳
				妹尾　由蔵	三	東条ジュン	三
				日野　善七	三	四宮　信	一

卒業証書

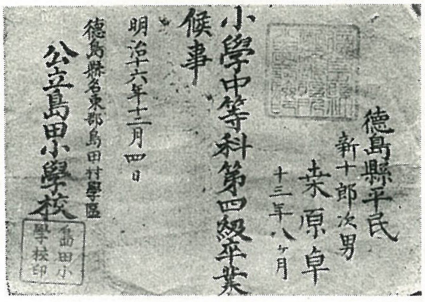
明治八年時中小学校

当時のもので，明治六年三月六日創立せられたころの，貴重な卒業証書である。当時の職員は河野道次郎・東条礼三の両氏である。



明治十二年庄村小学校

明治八年庄村正善寺におかれ，庄・島田両村をもって通学区域とした。



明治十六年公立島田小学校

明治十五年四月島田小学校を新築したころの卒業証書である。

回数	卒業年	男	女	計	累計
	昭和				
61	21	125	136	261	7,919
62	22	128	161	289	8,208
63	23	130	159	289	8,497
64	24	166	140	306	8,803
65	25	112	116	228	9,031
66	26	163	131	244	9,275
67	27	146	124	270	9,545
68	28	152	178	330	9,875
69	29	145	149	294	10,169
70	30	156	152	308	10,477
71	31	133	139	272	10,749
72	32	117	98	215	10,964
73	33	155	162	317	11,281
74	34	234	209	443	11,724
75	35	199	214	413	12,137
76	36	196	175	371	12,508
77	37	158	161	319	12,827
78	38	117	102	219	13,046
79	39	158	129	287	13,333
80	40	114	99	213	13,546
81	41	115	99	214	13,760
82	42	115	98	213	13,973
83	43	115	99	214	14,187
84	44	115	99	214	14,401
85	45	126	93	219	14,620
86	46	127	106	233	14,853
	計	7,944	6,901		14,853

二、小学校時代

まもなく小学生になると、上級生達と久保津神社に朝早く集合してさんざん遊んでから登校する。時には神社で遊び過ぎてカバンを神社の壁に掛けたまま登校した事が時々あった。区域の中では一番遠い所から歩いての登校、途中も遊びながらだから時間がかかる。加茂名小学校一学年は六組、人数は二四〇人位で六年生まで六組だから大変大きな小学校である。実はこの小学校は自分の先祖の河野道次郎が作ったとある。当時の校長桑原忠治先生が正月全校生が登校して大きな講堂で訓示を聞く習慣があり、訓示中で島田村の河野家が作ったと小学一年か二年の頃聞いてたが当時は重要なことと思ってなく、親にも聞かなかった。自分が七十歳の頃になって徳島の同窓生藤本吉一君と二歳上の鈴木勝章様にこの事を話し、調べてくれたら町の資料に残ってた。（別紙前ページに添付する）この校長先生は隣町二丁目に大きな屋敷で大きな門構で中には入った事は無い。だが大きな農業をしていた。家族の皆様は頭の良い人ばかりと評判であった。校長先生は小学一年当時から先輩から教えられた事は大きな自転車で当時八インチの普通の自転車より輪がひと回り大きな自転車で背すじをぴんと伸ばして登校する姿は名物校長で、威厳があった。この校長先生桑原忠治先生百歳以上元気にしてた。父親が河野富雄八十一歳で亡くなった時にも百歳越えて葬儀に来てくれてたのを覚えてる。

一学年の担任先生は高齢の女性の阿部先生だった。頭の髪は昔ながらの丸マゲでいかにも戦前の立派な先生だった。二学年も同じ先生だった。二年になると勉強は退屈で午後から学校をサボってよく遊んでいた。ある日午前終わったら学校を抜けたら傘を忘れたのを思い出し、当時取りに帰らないと無くなるのでまた堀を乗り越えて帰ると先生にばったり。気まずい事だった。てっきり怒られると思った。まわりの同級生達がサボっていたと先生に言っていた。だが先生は怒ることなく自分をかばう言葉でした。いつまでたっても忘れられない。

この二年の時から学校給食が始まる。それまではおそまつな麦飯弁当。母親が弁当入れてる時見ていると炊き上がった時は麦が上に集まるので上部をかき除けて米の多い所を弁当に入れてくれてたのを話を聞きながら見ていた。おかずはタ

クアンだった。よく覚えていなかったが、同級の女の子が俺のおかずはタクアンと言っていた。それが給食のパンになる皆んな喜んだ。パンなんて食べた事無いので心待ちに。だが当日台風で給食が来るか心配だったが、来た！うまかった。ごちそうだ。それから六年までパンとミルク（脱脂粉乳）自分にとって、ミルクも飲んだ事なしなのでうまい事。そのミルクが自分のクラス以外はまずいと言って余す組がほとんどなので余したミルクを自分のクラスに持って来て毎日十杯ぐらい皆んなで飲んでいた。十一杯が最高だった。

三年になって三組の担任先生が若い男先生森岡進先生になる。自分は相変わらず勉強は退屈だからまるでしないで体操は好きで、一時間目が体操の時間があった。終わった時自分が先生にかけあって昼まで体操の時間にしてほしいと言って続けさせてくれた。サッカーのシュートの蹴り方をボールの真横に左足を置いて右足で蹴ることを教わったのを覚えている。皆んなが好きな先生だった。授業が終わっても家に帰る前に先生の家が小学校が見える近くなので地域の頭のいい生徒が何人も塾のように無料で教えていた。自分も一日位は参加したが勉強は性に合わないのでやめた。がこの頃先生に呼ばれ、六年生からサッカーでなく蹴球と呼ばれていた試合を申し込まれたのでやるぞと言われ対戦して勝っていた。当時は学校内で三年三組は蹴球が強いと評判で、休みの日も集めて練習していた。この頃の先生の思い出を記した手紙を、前に添付する。

四年は男先生加藤先生だったが、授業中に自分達の目の前で突然教壇で倒れてそのまま亡くなった。目の前の事で皆んな驚いた。息子さん加藤君同級生と二年上のお兄さんがいた。頭のいい優しい人達で友達だったのか家にも遊びに行っていた。その後自分は四年一組に編入になる。若い女先生の篠原先生となる。鹿児島出身と聞いていた新任のよう。後に竹中喜代子先生となる。途中編入の為先生も知らず毎日午後からはサボって学校にはいなかった。五年も同じ担任になる。四年五年は余り思い出が無い。六年男先生若手の阿部先生かっこいい先生だった。相変わらず勉強はいっさいせず運動と遊びとけんかは売られればやってたがこの頃は誰にも負ける相手はいない。六年生の体育の時間男子は相撲があり砂場でクラス男子全員かたっぱしに負かすほど強かった。小学校六年間は運動と遊びとケンカで過ごした様なもの。六年の時自

分の弟栄三が一年生になり入学した時は我々六年生の倍の十二組になり人数も倍になっていた。後に団塊世代である。この時弟の栄三がいじめられてると聞いたので一年に行って、いじめているのは誰だと探すと秋山と言う。六年秋山の弟かと聞けばそうだとの事。俺の弟だからいじめるなよと言ったら、素直に言うことを聞いて、その後態度が変わった。それには理由があったのだろう。まさか自分の弟と知らず、兄に聞いて、河野の弟だと聞かされたと思う。この小学校時代の最も楽しいことは年一回秋の大運動会が最大のイベントだった。祭りのようだ。どの家族も応援にごちそう作って場所取りして、その外側は屋台の店がいろいろ在りお祭りさわぎだ。競走はいつも一等賞で賞品を沢山もらっていた。賞品と言ってもノートやエンピツだった。

三、中学校時代

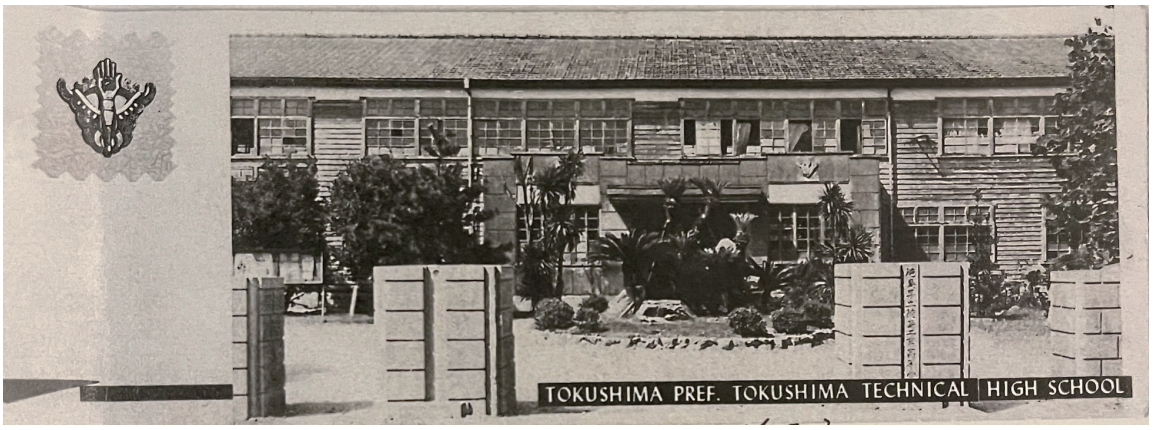
それから加茂名中学校へ進む。先ずは運動部だが一番の花形の野球部へ。この頃サッカーは人気なし。バレーボールも人気なし。強いチームでないが相変わらず勉強でなく野球ばかり最初の監督は川村先生と言う。教えてくれた事は、投げる時は腕を大きく使って投げるようだった。二年から選手として大会に出る。守備はショートである。よく練習した。道具は年々先輩の使い古し。グローブ、バット、軟式ボールも。ある日の午後父親が新品のグローブを届けてくれた。中学の練習は授業が終わると部室でユニフォームに着替えてグラウンドへ。夏の練習はバッティングと守備が主でかなりハードな練習をした。冬は裏山の桜の名所を中腹の中霊塔まで駆け足でトレーニング。毎日が楽しい。後半三年の監督は岸田先生だった。野球の成績はたいした事なく終わる。中学三年間は早くあっという間だった。いよいよ高校へ。どの高校へ行くか考える。貧乏なので手に職をと思い更に野球の強い学校を選ぶ。家からも一番近い徳工に決定。（写真　中学生時代野球部）

加茂名中学　野球部２年の頃

四、高等学校時代

正式な校名は徳島県立工業高等学校と言う。北野直鴻君と進学する。が加茂名中学から高校野球に進学したのは二人だけ。北野君は背が一番高く左利きで外野手でバッティングは長打でうまい。自分は一番の小柄だった。驚いた事に一年生だけで四十八名が入部して来て、強い有名中学からも来ていた。この人数の中から三年になった時に九人の選手に残れるのは大変な事だなと考えた。中にはちょっと名の知れた選手も来ている。富中の広瀬くん、足が早く肩がいい。身長の低い自分は大丈夫かなと思った。負けず嫌いの性格で不安になる事はなかった。高校は野球する為に入学したので勉強はしないと決めて野球一辺倒でやらないと選手になれないと思った。しかし入学後一学期で事件が。中間試験結果が七教科で赤点で、即教員室へ呼び出し。四、五名が呼び出されていた。先生の説教が始まる。学校始まって以来の前代未聞の事だとこっぴどく怒られる。全員野球部は駄目だ。赤点が無くなればまた入部を認めるとの事で退部となるが、自分だけはそうはいかないと。先生に野球やる為にこの高校に来たので退部はしないと言う。次回から赤点を取らなきゃいいんでしょうと言うことで退部しないで部活を続行する。練習は最初は一年間ボール拾い。たまにバッティングさせてくれるが打っても打ってもボールが外野まで飛ばない。バットも中学の軟式の時と違い硬式野球のバットは重く振れないと気付く。パワーがないと話しにならないとわかる。これじゃ身体を相当鍛えないとと思い早速バーベルを作る事を考える。当然買う事などできないので、幸い鉄の棒シャフトは大八車のシャフトがある。我家は少し畑もあって、米や麦や芋など作っていて大八車を使っていたが、もっと軽いリヤカーに変わっていたので、シャフトが余っていた。バーベルのシャフトにピッタリだ。重りの鉄の板は、代用品のコンクリートをこねて、ブリキ板を輪にして芯をシャフトが入る棒を立てセメントのコンクリートを流し込み手作りする。更に手首を鍛える為レンガをたてに指先の親指と人差し指と中指ではさみ上下に動かし手首を鍛える。ボールを握る要領だ。その他に、プロ野球が冬のキャンプが近くの蔵本球場でキャンプ練習試合があった。終わった後にベンチに入るとヒビの入ったバットが捨てられていた。焼印が土井垣とあった。当時スーパースターの

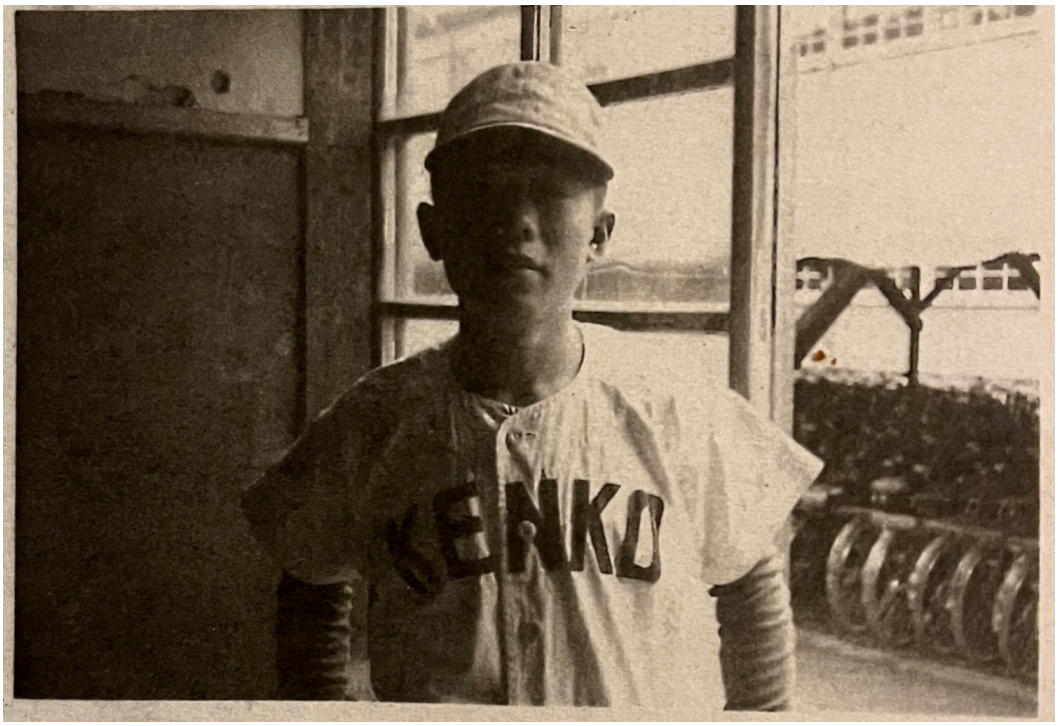
名捕手のものであった。そのひびをテープで補修して更に芯の部分に鉄板を取り付けて重くして素振り用のバットにして毎夜二十時から二十二時まで素振りだ。二年半位近所の人達は毎晩素振りしているので野球気狂いと言われていた。一年も続けていると体力も筋力も付く。二年の後半ごろ打力もアップし守備は三塁手で一塁までの投球は矢のように投げていたので、その時指導に来ていた先輩が自分のうでを見せてくれとサードまで来て自分の右腕を見に来たことも。二年は徳島県大会決勝で負け、三年は準決勝で負けで野球人生は終了となるが、目標の正選手で打順は三番か五番を打つようになっていた。これを境に野球は燃え尽き症候群となる。夏の大会終わると就職活動となるが、実際は活動はしない。学校に各企業から募集の依頼が届く。県内と京阪神がほとんどで東京志望は自分だけだったが東京の企業の依頼はほとんどなかった。月給は県内だと四千円くらい、大阪、京都、神戸だと五千円くらいだ。これが昭和三十六年、自分は勉強もしないで野球ばかりでいい就職などないかと思い、どこでも働く所があればと待ちの状態で何をしたいという希望もなかった。そんな時東京から珍しく初めての応募企業。家具のデパートスナムラと言う。月給は一番高い七千円以上だった。この頃は自分も同僚も何の仕事をやりたいとかはっきりした目標はなかった。家業を継ぐ人はいいが、とにかく仕事は何でも給料の高ければそこでがんばるしかない時代だった。この東京の会社、自分は東京志望の為、これ幸いと教員室へ申し込みに。ところが先生曰く河野は駄目だと。何でですか、先生言う、初めての給料の高い優良企業の為、先ずは優秀な生徒を送るとの事。当然の事と思う。自分の成績は最下位だし。そして採用してもらうと来年も募集が来るからとの事と言う。先生それはないでしょう。東京志望は自分一人のはずなので入社試験に自分を余分に加えてほしいとお願いしました。先生もやむえず三名の中に自分も加えて秋頃はじめて憧れの東京へ試験に行くことになる。徳島から列車（機関車）で小松島へ列車のまま船内へそして大阪へ天保山港から大阪駅へそのまま列車で、東海道線に乗り換え品川駅へ。品川から山手線で五反田駅へそれから池上線で荏原中延駅で下車して歩いて会社へ。会社から武蔵小山商店街にある旅館へ全国から集まった生徒三十名位かな。明日は五反田にある城南信用金庫本店四階にて午前筆記、午後面接試験となる。午前の筆記試験は全部書けた。午後からの面接は役員さんに何故か笑われぱなしの状態で終わる。出てくると皆んなに何で笑われていたの



徳島県立徳島工業高等学校

と聞かれたが自分はわからんと言う。徳島弁が笑われたか。その後採用結果が学校へ自分一人が合格していた。三月末頃入社の為上京。四月一日の入社式にトップ合格の為新入社員代表挨拶する羽目になる。トップ合格の要因は筆記試験全部書けたのは家にいる時は食事場で寝るまで話しながら自分は新聞をよく読むのが日課のようなもので試験問題が新聞に出てた事ばかりだった事。人生の分かれ目かな。種明かしです。いよいよ三月になると東京へ出発の日は近所の人達から餞別をくれて見送りしてくれる。母親からは、できそこないの息子だからえらい心配して送る言葉は、どんなつらくても会社は辞めたら駄目だよと。苦がはえても我慢するんだよと言った。すぐ辞めて帰って来ると心配していたと思う。（写真　高校時代）

左は山下耕作　元野球部監督
天満先生



徳工野球部

徳工野球部２年 決勝で破れる